

かがやき

— 令和6年度 差別の解消をめざすことをテーマとした人権作品集 —



第22集

千曲市
千曲市教育委員会

はじめに

人権教育は、差別や偏見をなくし、お互いの人権を尊重する意欲と実践力を持った人間を育て、すべての人間が「自由・平等」で幸せに生きられる社会の実現をめざすための礎（いしずえ）です。その実現のためには、人それぞれの違いを認め合い、よさを見つけ合い、優しさを与え合って生きていくことが大切です。

千曲市では、「千曲市差別撤廃人権擁護条例」、「人権とくらしに関する総合計画」および「千曲市部落差別の解消に関する啓発及び教育等基本方針」に基づき、あらゆる差別のない人権尊重のまちづくり施策の一環として、人権教育の推進を図っており、今後もより一層の充実が求められています。

こうした中、人権についての理解を深め、豊かな人権感覚を身につけることを目的として、市内小中学校の児童生徒の皆さんに差別の解消をめざすことをテーマとした標語・作文・ポスターを募集したところ、人権学習の成果がうかがえる作品を数多く応募いただきました。

本書「かがやき」は、その中から選考し入選となりました作品を掲載した作品集です。

多くの方々に本書を手にとっていただき、作品を通して今後の学校での学習並びに日常での人権啓発活動に活用していただければ幸いです。

おわりに、すばらしい作品をお寄せいただいた児童生徒の皆さん、ご指導や審査にあたられた先生方に、厚くお礼申し上げます。

令和七年三月

千曲市・千曲市教育委員会

はじめに

◆標語（小学生）

..... 1

◆ポスター

小学生の部

【優秀作品】

埴生小学校	五年	田村	ななみ	3
八幡小学校	五年	岡村	望未	3
八幡小学校	五年	作田	結愛	4
八幡小学校	五年	宮原	莉桜	4
戸倉小学校	五年	清水	美佑	5
戸倉小学校	五年	櫻田	望來	5

【佳作作品】

屋代小学校	六年	高橋	りあな	6
東小学校	五年	平岡	碧	6
東小学校	五年	中沢	颯紀	7

中学生の部

【優秀作品】

屋代中学校	一年	森山	瑚々	10
埴生中学校	二年	荒川	瑛湊菜	10
埴生中学校	二年	渡辺	奈緒	11
埴生中学校	二年	小岩	愛実	11

【佳作作品】

屋代中学校	一年	小林	来瑠	12
-------	----	----	----	----

埴生小学校	五年	山本	結月	7
治田小学校	五年	宮岡	優衣	8
更級小学校	五年	塚田	昂成	8
五加小学校	五年	越石	真帆	8
五加小学校	五年	川原	瞬	9
上山田小学校	五年	佐々木	結葵	9

◆ 作文

小学生の部

【最優秀作品】

戸倉小学校 六年 坂口 湊人……………13

【優秀作品】

屋代小学校 六年 越 優良……………14

治田小学校 六年 北島 愛莉……………15

戸倉小学校 六年 瀬在 栞那……………16

【佳作作品】

埴生小学校 六年 下條 莉空……………18

埴生小学校 六年 任 俊嘉……………19

治田小学校 六年 寺沢 旺志朗……………20

戸倉小学校 六年 小林 鈴……………20

上山田小学校 六年 有賀 大和……………22

中学生の部

【最優秀作品】

屋代中学校 三年 武井 杏……………23

【優秀作品】

屋代中学校 三年 中澤 心美……………24

更埴中学校 三年 飯島 凜音……………26

戸倉上山田中学校 三年 倉島 優衣……………27

戸倉上山田中学校 三年 南沢 瑠菜……………28

【佳作作品】

屋代中学校 一年 村石 彩佳……………29

屋代中学校 二年 高木 結衣……………30

更埴中学校 三年 宮原 汰希人……………32

戸倉上山田中学校 三年 古旗 あかり……………32

戸倉上山田中学校 三年 中村 夏月……………33

標語

あいさつは 元気にさせる ま法だよ

屋代小学校 四年内山陽太

責めるとか 暴言はくより いいところ

屋代小学校 五年塚田大空

あいさつは 仲が深まる まほうの言葉

屋代小学校 六年柳原福大

差別なし!! いじめもダメ!! みんなで楽しい世界を作ろう

東小学校 四年中澤千尋

ペースはみんなそれぞれ 自分のペースでいいんだよ

東小学校 四年中島美希

その言葉 心にきずを つけてない?

東小学校 四年多羅澤芽衣

助け合い 仲良く楽しく 光るんだ

埴生小学校 四年原山陽菜

ゆずりあい 先手をとらず きみがさき

埴生小学校 四年小林七緒八

道とくは 気もちを伝える きょうかだよ。

埴生小学校 四年関夢叶

しんけんに 人の気持ち 考えよう。

治田小学校 四年斎藤一栞

がんばろう みんななスマイル 目指してさ

治田小学校 四年深澤旬

差別をすると みんなの心に きずがつくよ

治田小学校 四年緑川日夏里

その言葉で 未来がかわるよ 「やめようよ。」

八幡小学校 四年中澤昂柊

ほめ言葉　たくさん言って　いいムード

八幡小学校　四年　中村心音

悪口は　ぜったいだめだ　ぜったいね

八幡小学校　四年　森山來毅

大丈夫　心配ないよ　皆笑顔

戸倉小学校　四年　永井心遥

優しい言葉　心と心　つなげ合う

戸倉小学校　四年　瀧沢結衣

大丈夫？　落ち込む君に　かけ言葉

戸倉小学校　四年　古旗のぞみ

みんなとね　男女仲良く　遊んでね　元気なクラス　毎日楽しい

更級小学校　四年　小林はなえ

教え合い　クラス仲良く　学習だ　授業中には　いっぱい発言

更級小学校　四年　塚田碧空

あいさつで　全校仲良く　いつまでも　毎日まほう　たくさんかけよ

更級小学校　四年　塚田桃佳

ともだちと　なかよくしよう　たのしくね

五加小学校　四年　山崎耀太

決めつけて　きずつく人も　いるんだよ

五加小学校　四年　齋藤真織

みんなちがうこせいがある。　それをへんだと言わない。

五加小学校　四年　大久保柚希

なかよくね　えがおで楽しく　けんかせず

上山田小学校　四年　篠原莉愛

いじめして　どうしてわらうの　おかしいよ

上山田小学校　五年　中島花菜

気付こうよ　君の「すごい」を　見つけよう

上山田小学校　六年　宮川えん

ポスター

◆ 小学生の部 ◆

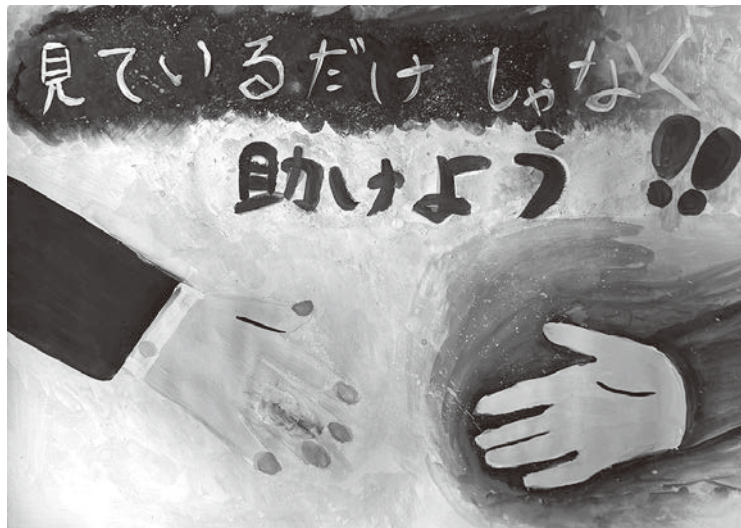
優秀作品



埴生小学校 5年
田村 ななみ



八幡小学校 5年
岡村 望未



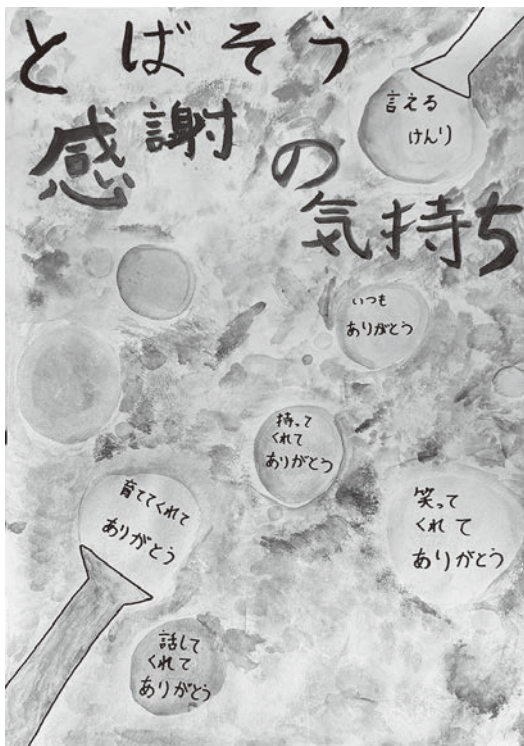
八幡小学校5年
作田結愛



八幡小学校5年
宮原莉桜



戸倉小学校5年
清水美佑



戸倉小学校5年
櫻田望來

佳作作品



屋代小学校 6年
高橋 りあな



東小学校 5年
平岡 碧



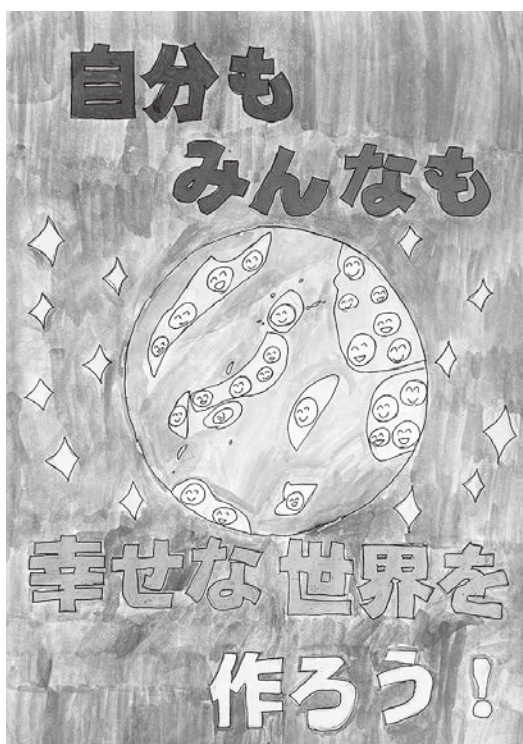
東小学校 5年
中 沢 颯 紀



埴生小学校 5年
山 本 結 月



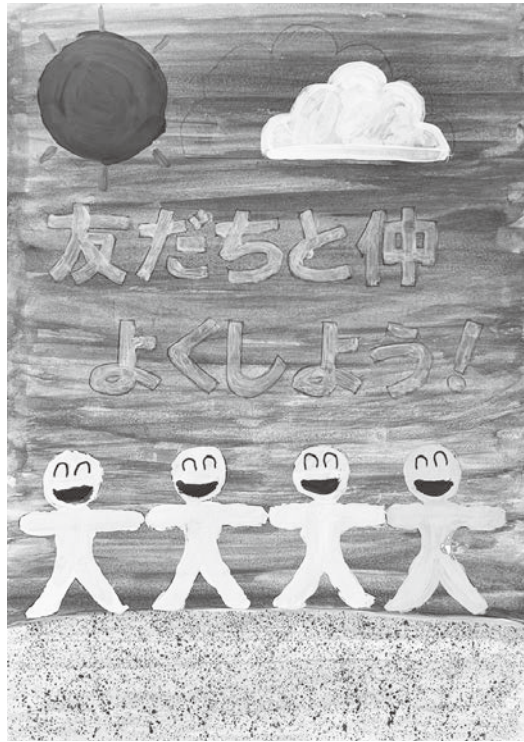
治田小学校 5年
宮岡 優衣



五加小学校 5年
越石 真帆



更級小学校 5年
塚田 昂成



五加小学校 5年
川原 瞬



上山田小学校 5年
佐々木 結 葵

優秀作品

◆ 中学生の部 ◆



屋代中学校1年
森山 瑚々



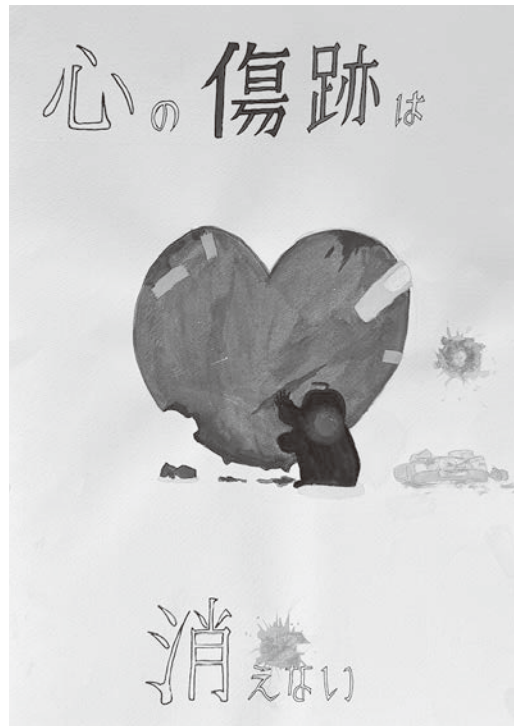
埴生中学校2年
荒川 瑛湊



埴生中学校 2年
渡 辺 奈 緒



埴生中学校 2年
小 岩 愛 実



佳作作品

屋代中学校1年
小林来瑠

作文

◆ 小学生の部 ◆

最優秀作品

「周りの支えで変わる心」

戸倉小学校 六年 坂口 湊 人

僕は小学三年生の時に学校に行けない時がありました。理由は、人の視線がすごく気になってしまっていたからです。

特に授業で先生にあてられた時や話し合いなどで意見を求められた時に答えられなくなることがあります。なぜ答えるのが苦手なのかというと、僕の話の聞くためにみんなの視線が僕に集中している中、すぐに答えられなくて、「早く答えなきゃ、何か言わなきゃ、でも何も分からない、答えられない、どうしよう」と思っているうちに具合が悪くなってしまいうからです。分からないなら分からないと言えればいいのに、その時の僕は、「答えられないと先生に怒られるんじゃないか、みんなからそんなことも答えられないの?」と思われるかもしれないと思っ

ていて黙ってしまっていました。それでも友達と遊ぶのは楽しいし、先生の事も好きだから自分なりに頑張っていたけれど、ある日、体調をくずして数日休んでしまったのをきっかけに学校へ行くことが難しくなりました。朝になると「学校に行かなくちゃ」と思うと急にお腹が痛くなってしまいます。家にいたら、みんなから答えや意見を求められないし、みんなからの視線も気にしなくて良いので、安心していられました。

そうやって学校に行かれない日が続く中で、その時の担任の先生が毎日電話をしてくれてくれました。「好きな時に来て、帰りたくなったらいつでも帰っていいよ。嫌な事はしなくて良いし、湊人さんのしたいようにして大丈夫だよ。みんな待ってるよ。」と言ってくれました。お母さんとお父さんも同じように言うてくれました。その言葉のおかげで「少しだけ行ってみようかな」と思えるようになってきました。いつでも帰れるように毎回お母さんが付き添ってくれたのも心強かったです。

「嫌な事はしなくて良い、したいようにして良い、帰りたい時に帰って良い」という安心があったおかげで、数時間だけでも学校へ行けるようになりました。そのとき初めて周りに目を向けることができるようになった気がします。答えられなくても先生から怒られることはなかったし、周りのみんなも嫌なふうで思っている感じではなかったたので、自分の考えすぎだったことに気が付きました。友達は、数時間しか来ない僕をいつも笑

顔で迎えてくれて、たくさん話しかけてくれたり、一緒に遊んでくれたりしました。「学校にもっと来なよ!」とたくさん言ってくれた言葉は今でも忘れません。お母さん、お父さん、先生、友達の言葉や行動がとても嬉しかったのを覚えています。

今までは、なぜか勝手に不安になって、自分の心配ばかり。

周りの人のことが正しく見えていなくて、相手の反応が怖くて、言いたいことや思ったことを伝えようとも見ようともしませんでした。しかし、たくさんの方が優しくしてくれたおかげで、だんだん言いたかったこと、思ったことが話せるようになってきて、今は楽しく学校に行くことができています。

これまでの経験から、周りの人達にすぐ助けられていることに気が付いたとき、自分は変われるということ、そしてこれからは自分も、同じような友達がいたら、自分がしてもらったことをしてあげたいと思うことができました。今では下級生や友達など何か困っている人がいたら、声をかけたり、話を聞いたりして、僕にできることをしています。これから、周りに目を向けて、いろんなことに気を配れる人になれるように頑張ります。そのようにみんなが思いやりの心をもつことができれば、きつと悲しい思いをする人が減ると思います。そして僕も、まわりのみんなもいっぱい笑顔でいられたら良いな、と思います。

優秀作品

みんなが平等に暮らせる社会へ

屋代小学校 六年 越 優良

私は、障がい者と健常者どちらも同じように支え合いながら生きていける社会になればいいと思います。

それは、障がい者、健常者どちらも同じ人間なのだから区別する必要はないと思うからです。それに障がいをもっている人もそうなりたくてなったわけではないと思うからです。

日本には、十六人に一人、体や心に機能の障がいがある人がいると言われています。なので、家族や友達、親族に障がい者がいてもめずらしくないのです。

障がい者と健常者が平等に暮らせるために、今、日本ではいろいろな工夫をしています。例えば、足が不自由な人は車いすを使用している人もいます。その人が上や下の階に行きたいときは、ほとんどの人がエレベーターを使用します。そのため車いすを使用している人が利用しやすいよう、ボタンの位置を低

くしたり、方向を変えずに出入りできるように前後にとびらをつけたりするなどの工夫です。他にも、視覚に障がいがある人に道を案内するために、駅や道路などには点状ブロック・線状ブロックが設置されています。駅のホームのはじめに設置されている点状ブロックでは、線路への転落を防ぐため、ホームの内側と外側が区別できるように内方線をつける工夫もされています。また、身近なものでは車いすを使っている人やぼうこうや腸などの内ぞうの障がいがある人、赤ちゃんを連れた人などが利用しやすい様々な機能をつけられた多機能トイレや車いすを使っている人や段差を上るのが困難な人が使いやすいように、道路や出入り口などに十分なはばをもったスロープなどがあります。このような工夫は、ほとんどの建物やお店、学校にもあり、みなさんも見たことがあるのではないのでしょうか。

ですが、このような工夫をしても一人一人の考えが変わらない限り共生社会は、つくれないと思います。例えば障がい者働けないと思っっている人が多いと思います。

「令和五年障害者雇用状況の集計結果」によると、ほとんどの企業が障がい者をやとっていないという結果になりました。本当なら働けるのに障がいがあるから働けないという思いこみで、障がいをもって人は十分に働くことができないのが現状です。しかし、今、日本は超少子高齢化が進み、企業は人手不足に悩んでいます。だからこそこれからは、障がい者も働け

ないというまちがった考えを変えて、誰でも平等に働ける社会にしていくなが必要だと思えます。

まだまだ私たち健常者側の障がいの理解がうすく、障がい者を傷つけていることがあると思います。だからこそ私たちは、「障がい」ということをもっと知って、障がい者を傷つけない、苦しい思いをさせたりしないようにしないといけないと思います。そのために今からできることをしていきましょう。例えば、車いすを乗っている人が、段差があって困っていたら「大丈夫ですか？」と声をかけたり、電車で優先席を必要なが乗ってきたら席をゆずったりすることなど、だれでもできることから実践していくことが大事です。そして、できるだけ早く障がい者と健常者が支え合って、すべての人が平等に生きていく社会になってほしいです。

助け合いの輪を広げよう

治田小学校 六年 北 島 愛 莉

私が差別を解消するために大切だと思うことは、それがだれであつても同じように困っている人がいたら助けるということです。助け合いは、勇気を出せばだれでもできることです、

その勇気を出すのはとても難しいことだとも思います。しかし、勇気を出して私に声をかけてくれた、まさに助け合いだなと思った時があります。

それは以前、学校で私がいつもいっしょにいる友達が休んでしまった時のことです。休み時間に一人でしたら、あまり話をしたことがないクラスメイトが「いっしょにこっちで遊ばない？」とさそってくれました。後で、「なぜ声をかけてくれたの？」と聞いてみると「だって前、私が一人だった時助けてくれたじゃん！そこは助け合いだよ。」と笑顔で話してくれました。私がその時、話しかけることができたのは、友達がそばにいたからでした。それなのに、みんなの所に私を一人で助けに来てくれた彼女はやっぱりすごい人だなと思いました。

そのことがあってから私は、できる限り周囲で困っている人がいないかを見て、一人で休み時間を過ごしている人には声をかけるようになりました。彼女のおかげで、助け合うことの大切さを改めて実感することができました。

差別を解消するために大切なのは、まず一人でいる人を減らす、困っている人がいたら助けるということだということをよく実感することができました。これから私は、自分の助け合いの輪を少しずつでも広げ、差別を解消するためにがんばりたいと思います。

「いじめをなくすために」

戸倉小学校 六年 瀬 在 栞 那

私は、今回いじめについて話しているかと思いますが、なぜこのテーマについて話そうと思ったかというところ、ニュースでいじめの問題を耳にしたからです。いじめは、些細なことや、何気なく言った一言でいじめにつながってしまいます。そのことが理由で辛い思いをしたり、自殺してしまったりする人がいるのも事実です。なので私は、いじめを絶対に許さないし、いじめをなくすために何ができるのかを考えてみました。

私は、これまで友達からいじめられたことはありませんが、人の言葉や行動によって傷ついてしまったことがあります。その時は小さい頃だったのであまり気にしていませんでしたが、高学年に上がるにしたがって些細な一言でも気にしてしまうことが多くなりました。ある日、テレビでいじめのニュースが流れてきました。そこで私は、いじめの苦しさを少し想像してみました。そうしたら少しいじめの苦しさがわかりました。

そこで、いじめについて詳しく調べてみると、インターネットのいじめというのがあります。インターネットのいじめは、SNSでの誹謗中傷などがあります。誹謗中傷とは、「人や企業の社会的評価を低下させるような根拠のない悪口や

デマを言いふらす、またはそれらをインターネット上に投稿したり、人格を攻撃したりする行為」のことを言うそうです。私は、根拠のないデマや悪口を流すことが誹謗中傷やいじめにつながるということを初めて知りました。そして、いじめはいじめられた人の命を奪う行動にもつながるので、いじめは絶対にしてはいけないと強く感じました。SNSはとても便利なものだけど、誹謗中傷をしている人は、自分の軽はずみな一言で人の命を奪えることに気づいてほしいです。

また、より身近な問題では、学校でのいじめなどがあります。学校でのいじめは、自分も学校に通っているのですが、とても怖いと思っています。特に学校でのいじめは、毎日過ごす場所なので、自分の居場所がなくなってしまうと思うとても怖いのです。例えば、自分の経験では、その時のノリで何気なく言ったことが人によっては重く受け止めてしまったり、面白半分をやったことを相手は嫌だと思っていることがあったりしました。なので「些細なことでも相手が傷ついたらそれはいじめなんだ」という気持ちをもっていたいと思いました。反対に自分が嫌なことをされた立場だったら、嫌ならはっきりと「嫌だ」と言ったほうが自分を守ることにもなるし、相手のためにもなると思います。「嫌だ」ということで自分の気持ちを伝えられるし、相手も「今度からやめよう」と気をつけることができるからです。つまり、自分も相手も傷つかないような発言や行動

を心がけたいです。これから先、きっと「ごめんなさい」という言葉では解決しないことの方が増えると思うので、注意しながら毎日を過ごそうと思いました。

いじめは、なくそうと思ってもなかなかならないものです。なので、一人一人の些細な言動がいじめにつながる可能性があるということを意識して生活していく必要があると思います。そうして、少しでもいじめがない平和な世界になるといいと思います。自分だけの力じゃ何も変えられないかも知れませんが、自分の心がけて悲しい思いをする人や、いじめが少しでもなくなると思うと、がんばれる気がします。みんなもそうであってほしいです。みんなが楽しく笑顔で毎日を送ってほしいと思います。

佳作作品

相手への思いやりから始まる優しさ

埴生小学校 六年 下 條 莉 空

私は世界中の人達がウエルビーイングを互いに大事にして生きるためには、沢山の人や、友達への思いやりがとても大切だと考えました。なぜなら、沢山の人や、友達への思いやりがあることで、相手の気持ちを考えて、困っている人を助けるという行動にうつすことができるからです。

そのように考える理由は、私の経験があるからです。授業中のことでした。何をしたらいいのか、どうしたらいいのかわからなくなってしまう時、困っていると、友達が優しく教えてくれて、とても嬉しかったということがありました。きっと、その友達は私の様子や気持ちを考えて、何かを察してくれたのだと思います。だからこそ、相手への思いやりとは、困っている人のために、相手が傷つかないような優しい言葉をかけてあげたり、気遣いをしてあげられるということや、相手の立場に

なって考えて、相手は今どう思っているのか考えて行動してあげることだと思いました。

他にも、相手の元気がなかったり、気分が悪そうにしていたりする時、そのことを感じて励ますなど、話を聞いてあげることで相手に対しての思いやりだとも思っています。そして、このように友達への思いやりがあることで、もっとお互いの仲を深めたり、信頼できたりなど、良い関係を築くことにもつながっていきます。自分が困っているとき、元気がないとき、共感して寄り添ってくれる友達がいたら、とても心強いと思いませんか？

このように、ウエルビーイングを考えることを通して、相手に思いを寄せて考えることの大切さを広められたらいいと思います。相手を思いやることは、互いを認め合うことにもなるため、いじめや、争い、差別などがなくなると思います。なので、これからも家族や友達だけでなく、他の人への思いやりを忘れないで、困っている人がいたら助けてあげる、共感し合い行動するなどを意識して生活していきたいと思えます。

みんながウェルビーイングな社会へ

埴生小学校 六年 任 俊 嘉

六年生になって初めてウェルビーイングという言葉を知りました。最初、先生から聞いた時は、「何、それ?」と思いました。自分がなりに考えてみました。私が考えるウェルビーイングは、「人の気持ちなどいろいろなことを考えて理解し、お互いに尊重し合うこと。そして、すべての人が平等にくらす。」です。

社会の授業でも学習しましたが、日本国憲法でも「どんな人も平等であるべき」とあります。でも、実際にはどうなのでしょう?。まだ平等ではない部分があると私は思います。例えば、障がいを持っているから、自分たちと違うからなどの理由でその人を避けたりする人を実際に見たことがあります。それは、恐らくその人のことを理解できていないからだと思っています。だから、私は、みんながお互いの個性や障がい、そして気持ちなどを理解することができたら、いい人間関係が築けるのではないかと思っています。そして、それはウェルビーイングにもなると思います。

お互いが相手のことを知ろうと努力すると話題が増えるし、仲が深まったりするなど人間関係がよりよくなり、もっと気持ち

ちよく過ごせるようになるのではないのでしょうか。

前に私のクラスに障がいを持った子がいました。その子はみんなが嫌がることをしていて嫌われていました。でも、ある時、その障がいのある子が本当は楽しい子だということを知りながら知りました。すると、みんなと仲良くなって一緒に遊んだり、よく話したりするようになりました。そして、その子のことをもっと理解することができました。

このような経験から、私は周りの人たちを理解することはとても大事なことだと思いました。

私がウェルビーイングのことを知る前に喋ったことが少ししかなく、仲良くなりたかった子に思い切って話しかけたことがあります。話してみたら、すごく気の合うことがわかって一番仲の良い友だちになりました。そこからいろいろな人を積極的に知ろうとして話しかけたらたくさん仲の良い子が増えて毎日が楽しくなりました。

このような理由や私が経験したことから、人の一面だけを見て、この人はこういう人だと決めつけて避けるのではなく、思い切って話をしたり、一緒に遊んだりする中で、その人のよい面も見えてくると思います。

私だけでなく、多くの人がそうすれば、お互いのよい面もわかってきて、いい人間関係ができていくと思います。そして、それがウェルビーイングにつながっていくと思います。

相手の気持ちを考えて

治田小学校 六年 寺 沢 旺志朗

ぼくは、スポーツ少年団の野球チームに入っています。

スポーツなので勝ち負けがあります。試合に勝ったらみんな喜び、あの子のいいプレーで勝ったと思ったり、みんな頑張ったという気持ちになります。だけどその反対に試合に負けるとみんな落ち込んだり、あの場面でミスをしていなかったら勝てたかもしれないという気持ちになり、あの子のせいで負けてしまったという気持ちにもなることもあります。でも野球は一人でプレーするのではなくて、チームのみんなと力を合わせてプレーするので誰かがミスをしたらみんなでおぎなえばいいと思います。

ぼくが四年生の時に、ミスをして負けてしまって落ち込んでいる時に、六年生の先輩が「旺志朗のせいじゃないから元気出して。」と言ってくれてとても元気が出ました。今、甲子園での高校野球の試合を見ている。ピンチの時に声をかけ合ったり、落ち込んでいる選手をばげましました。

だからぼくも相手の気持ちを考えて、言ったら相手が悲しむだろうということを言わないことや落ち込んでいる子がいたらどんな言葉をかけたら元気が出るかを考えて声かけをしようと思います。

思います。

このように、相手の気持ちを考えて声かけをすることが大切だと思います。

『らしく』なんて必要ない

戸倉小学校 六年 小林 鈴

みなさんは、「○○なんだから」「○○らしくしなさい!」と耳にすることはありませんか。私は『らしく』という言葉があまり好きではありません。なぜならそのような言葉は差別に関わってくるかもしれないからです。差別とは、特定の集団に所属する個人や性別など特定の属性を有する個人・集団に対して、その所属や属性を理由に異なる扱いをする行為です。個人的に一番気になるのは性別に関する差別です。ニュースや新聞でも性別のことが問題で自殺をってしまった学生がいたことを知って悲しくなりました。だからその学生が気持ちよく学校生活をおくれるようにするためにいじめ・差別を無くさなければいけません。

ジェンダー差別という言葉はみなさん耳にしたことはあると思います。他にもあってジェンダー平等という言葉があります。

す。ジェンダー平等とは性別に関わらず、平等に責任や権利や機会を分かち合い、あらゆる物事を一緒に決めていくこと。今の私達にとって大切なものなのです。でもみなさん、「それじゃあ区別も差別と同じになるの？」と考える人たちもでてくると思います。でも区別と差別はちがいます。「差別」は「人やものの取り扱いに差をつけること」それに対して「区別」は「違いによって分けること」です。このように「差別」と「区別」は意味が全く違うのです。私は差別をなくすために、今世界でどのくらいの人が差別を受けているのかを調べてみました。すると推定二億五千万の人々が、社会的に排除されたカースト（社会階級）の家に生まれたために、差別を受けていることがわかりました。世の中にはこんなに多くの人々が差別を受けています。「差別」は学校などだけで起こることではありません。例えば、「女性なのに出世してすごい！」「新入社員にしてはいいこと言うねー」といった言葉。一見なんてことのない、またはある意味ほめ言葉のようにも聞こえますが、その発言の裏には「女性は出世できない」「新入社員は仕事ができない」といったような無意識の思い込みがひそんでいます。このような「〇〇だから」「〇〇じゃできない」という思い込みが、差別につながることもあります。

私達だってそんなこと思っただけでもそう思い込んでいることがあるかもしれません。なので人に「〇〇だから」「〇〇じ

やできない」という思い込みではなく一つの「可能性」を信じてみることも、大切なことだと思います。例えば、今まで差別を受けてきた人を助けたい！と思ったとします。だけどその人は友達や家族にいじめなどを受けてきているかも知れないので「何でも相談してね」「助けてあげる」と言っても信じてくれないかもしれません。だって何回も騙されてつらい思いをしているかも知れないからです。だから「困っているなら相談してね」など初めは少し距離をとってから話してみれば、相談したり頼ったりしてきてくれるかも知れません。だから人を助けたかったら初めはいろいろ聞かないで、「困ったら相談してね」「力になるよ」など優しい言葉をかけたほうが「あの人はいい人かも」と思い頼ってくれるかも知れないです。

この学習をするまでは差別なんて私には関係ない、人権ってよく分かんないと思っていました。でも世の中には差別を受けている人たちが多くいることを知って、これは私の将来にも関係してくる大事なことだと思い始めました。人権とは誰もが生まれながら持っている権利、差別とは人をマイナスイメージで判断してその人を社会の中で不当に扱ってしまうことという意味を知って、これから人権や人の気持ちについてを大切にしようと思いました。私だけでなく世界中の人々にも差別をせず、人権を大切にしていってほしいです。

思いやり、後悔しない人生を歩めるように

上山田小学校 六年 有賀大和

後悔と聞くとなにを思い浮かべますか。僕には後悔していることがあります。僕の祖父は昨年の四月に亡くなりました。病気が分かったときは悲しくて心配していろいろお手伝いをして優しくしたりしました。しかし病気の期間が長くなるにつれて、洗面台やトイレを汚したりする祖父のことを煩わしく思ったりしてしまいました。ずっと咳をしている祖父に「うるさいな。」と言ってしまったこともあります。祖父はある日突然容態が悪くなり、あっけなく亡くなってしまいました。病院から連絡を受けて、僕たちが病院に駆けつけたときには祖父の心臓は動いていませんでした。また温かい体に触ったら、涙が止まりませんでした。看護師さんが「まだ聞こえるからお話してごらん。」と言ってくれたので、僕は「おじいちゃんありがとう。おじいちゃん大好きだよ。」と声に出して何回も言いました。

本当は生きているときに素直に伝えられたらよかったと思います。亡くなってからいろいろな場面で祖父を思い出します。僕がピアノの練習をしているときには、たくさん間違えてもどんなに下手くそでも祖父はじっと聴いていて「いい気分だ

な。もっと聴かせてほしいな。」と言っていました。おもちゃや物が壊れたとき、よく直してくれました。今はなにかが壊れても自分で直すしかなくて大変です。僕が好きな工作もたくさん一緒に作ってくれました。今はいいアイデアが浮かんでも自分一人ではなかなかうまくできません。祖父からはたくさん優しくさをもらっていたのにぼくはあまり返せませんでした。ひとつ思い出すのは背中が痛いときにもんであげたことです。祖父は「ありがとう。とっても気持ちが良い。よく眠れそうだよ。」とにこにこして言いました。祖父に優しくしてあげたとき、そして優しくしてもらったとき、いつも僕の心はじんわりと温かく明るくなりました。そういう時間をもっと持てたらよかったです。

この前喧嘩したとき、妹を押したら妹が転んで肘を擦りおいてしまいました。プールの授業を休んでいる妹を見た時同じような後悔の気持ち浮かんできました。あの時一瞬で考えて、妹を押さなければよかったと後悔しました。また同じ後悔をしていると思えました。僕は妹に謝りました。妹が許してくれて一緒に遊んで笑っているときにまた心がじんわりと温かくなりました。これからは、僕は心を強く持つてなるべく後悔をしないようにしようと思えました。僕や僕の周りの人の人生に心が温かく、明るくなる、そういう時間を増やしていきたいです。

最優秀作品

誰もが自分らしく

屋代中学校 三年 武井 杏

中学校三年間の人権学習を通して、部落差別のことについて学んできました。最初の頃は「部落差別」という言葉自体を私は知りませんでした。二年生までの学習を終えたとき、正直「なくなってほしいけれど、差別はきつとなくならないだろう」と思っていました。

三年生の授業では被差別部落出身の人に対する結婚差別について学習しました。内容は、結婚する予定の女性が、自分が被差別部落出身であることをパートナーである男性に打ち明ける話でした。自分が男性の立場になって考えたときは、女性にそう告げられたら「そんなこと気にしないよ」と答える自分を想像しましたが、反対に女性の立場に立ってみると、「そんなこと気にしないよ」と言われたら「悩みに悩んで打ち明けたのに

『そんなこと気にしないよ』のたった一言で軽く済まさないでほしい」という思いになりました。一方から見ればささいな何でもないことが、もう一方から見れば大きなことで、もしかしたら悩みやつらさの原因になっていることもあるかもしれません。相手の立場に立って伝えることは簡単なことではないと感じました。

人権学習で様々な事例を通して考えていくうちに、私は「言葉」って難しいものだと思うようになりました。その理由は、言葉は人に伝わるごとに受け取る人によって変換されていくものだからです。差別や偏見は、言葉の変換による誤解によって生み出され、大きくなってしまったと言っても過言ではありません。けれど、変換されなかったために、一言一句正確に伝えることはとても難しいし、そもそも自分が思ったことを一つの誤解もなく相手に伝えることは不可能です。だからこそ、たとえうまく伝えられなかったとしても、言葉を伝えられた人が少しでも嫌な気持ちにならないような、そのことで傷つかないような伝え方をしたい。今はそう思っています。

授業で感じたことはもう一つあります。それは部落差別の問題に関わっている人だけがこのことを知ればいいのではなく、この世界で生きている人たちがみんなこの問題に関心をもって知ろうとすることが大事だということです。最初は「知ろうとしたけれど、よくわからなかった」でも、全然構いません。少

しても多くの人がこのことを知ろうとする気持ちを持つことで、社会全体の考え方がだんだんと変わっていき、差別や偏見がなくなっていく一歩目になるのではないかと思います。

実際に自分が差別を受ける立場だと考えてみると、今まで自分がしてきた行動を考えさせられることがたくさんあります。差別を受けてつらい思いをしている人や、その苦しみに悩んでいる人が、この作文を書いている現在もいるのに、「(差別は)どうせなくならない」と他人事のように考えていた自分が嫌になります。自分ができることは決して多くはないけれど、まずは身近な人に対する言葉の伝え方を考えること、そして、なるべく多くの人が人権の問題に関心を持てるように、今回学習したことを発信していきたいです。

今まで差別や偏見に苦しみ、たくさん我慢してきた方に私はこう伝えたいです。「自分らしく生きて」と。自分のことで頭がいっぱいになるくらい自分を愛して、他の人のことが気にならないくらい自分らしく生きて、幸せになってほしい。そう思います。

どこからどこまでが差別なのか、線の引き方は人それぞれ違います。答えがあるわけではなく、それぞれが考えて行動をしなくてははいけません。同じように、幸せだと感じる瞬間もそれぞれで違います。誰もが自分なりの幸せを見つけられる世の中にしたいです。差別はなくならないと思っている人に、少して

も考えて行動してもらえるようになり、そこから少しずつでも差別や偏見がなくなっていくこと。誰もが自分らしく生きられる社会を目指して、私自身も行動していきたいです。

優秀作品

「無くす努力」よりも「受け入れる努力」

屋代中学校 三年 中 澤 心 美

前期人権学習では、結婚差別がテーマでした。この学習で私は様々なことを思い、たくさんのことを学ぶことができました。

まず、みなさんがもし被差別部落出身であった場合、結婚するパートナーに打ち明けることはできますか？私ではできたとしてもその後の相手の両親、パートナーはどう思うのか不安になると思います。きっと被差別部落出身である実際の人もこのような気持ちになると思います。また、パートナーが部落差別のことを知らず、「部落のことは知らないけど…きっと大丈夫だよ!」と声かけされた場合、どのような気持ちになりますか？

一見温かい言葉のように感じ、その言葉がすごくうれしように感じますが、よく考えてみると「知らないのにどうしてそんなことが言えるの?」と思ってしまいます。この場合、パートナーは被差別部落のことについてよく調べ、正しい情報を身に着けてから、被差別部落出身である相手と向き合うべきだと私は感じます。

そして『自分や友達が被差別部落出身なのかを調べる』行為は、先程の『よく調べる』とはまた違った『確認する』という意味です。これは何気ない行為かもしれませんが、実は一番危険かもしれません。「自分や友達は被差別部落出身じゃなかった。問題ないな」と考えたとき、その「問題ない」は逆に考えると「被差別部落出身は問題がある」という意味にもなります。何気ないその行動が自分では気づかない差別を作り上げていくことにすら気付くことができませぬ。このことについて考えた私は「もう全部が差別になってしまうかも」と感じました。実際差別には白黒はつきり分けられるところが少ない。だからこそ、差別について慎重に自分の言動に気をつけることができるのではないのでしょうか。自らの行動を見直すのもいいかもしれません。

私を感じたこと以外にも部落に対して、差別に対していろいろな意見があると思います。だからこそ差別は今もなお残っているのです。自分が一度相手の気持ちになってみたり、その時

自分がどう感じたかを考えたり、正しい情報を身に着けることで社会からほんの少しずつですが差別がなくなっていくと思います。

次に後期人権教育では、自分自身で深く知りたかった差別のテーマを調べていく活動を行いました。そこで私は高齢者差別について深く知りたかったです。

まず高齢者差別の定義ですが、「年代を理由にした差別や偏見のこと」です。他にもエイジズムという言葉があります。エイジズムとは高齢者だけではなく、若者など様々な年齢に向けられた差別のようです。高齢者差別、エイジズムともに共通する点は個人の能力に関係なく、年齢で判断するという点です。いずれにせよ相手のことを“その人”として見ていないという点は変わりませぬ。

また、他の人が調べた話を聞くと、「無くす努力よりも受け入れる努力」という言葉が出てきました。この言葉は人権教育をやってきた中で一番心に残っている言葉です。この言葉はどんな差別にも当てはめることができ、私自身とても感動しました。例えば高齢者差別の場合、今あるすべての高齢者差別をなくすことはとても難しいというか、ほとんど不可能です。けれど、「無くす努力よりも受け入れる努力」この言葉にもある通り、なくすよりも受け入れる。つまり高齢者差別をなくすよりも受け入れることで、世界から少しずつですが差別が消えてい

くのではないでしようか。

以上の学びから、差別について改めて深く考えさせられました。身の回りにも見えていないだけで小さな差別があるのかなと思うと、もっと注意深く世界を見ていく必要があるように感じました。

後期人権教育月間を通して

更埴西中学校 三年 飯島 凛 音

前期の人権学習では子どもの権利についての学習を行いました。世界には今の私達には考えられないような、過酷な生活を余儀なくされている子どもたちが大勢いることを知り、世界が抱えている子どもの貧困や教育などの問題の解決はこれからの社会を豊かにしていくためにもとても大切だということ学びました。そして後期の人権学習では、個人個人を尊重することについての学習を行いました。大きく二つに分けるとLGBTQについてと同和問題についてです。

みなさんは、学校などで多くの人々と関わるときに心がけていることなどはありますか。私は今期の人権教育を通して、自分の中で相手のことを勝手に決めつけるのをやめ、相手の気持ち

を聴くことを大切にしよう決めました。なぜなら相手の気持ちは相手にしかわからないからです。これは一見当たり前のように思えるかもしれませんが、これが当たり前になっていなくなると多くいるせいで、悩んでいる人が世界には大勢いるのです。私はこのようなことで悩んでいる人たちの気持ちを少しでも理解するために二つの事を考えました。

一つは相手の立場になって物事を考えることです。ありきたりなことだなと思うかもしれませんが、これはとても大事なことです。今期の学習で、実際に自分の性について悩んでいた人の体験談を知りました。その方は実際に友達にかけられた言葉で救われたと語っていました。悩んでいるときは周りの支えがとても重要なのです。相手の感じたことや心情をすべて理解するのは不可能だけれど、少しでも理解しようというその姿勢が相手の心を救うかもしれません。

二つ目は相手の家系や生まれた場所など関係なく、一人の人として接することです。後期の人権学習では同和問題についての学習を行いました。昔、被差別部落として差別されてきた「同和地区」という地区に住んでいる人たちが今もまだ差別に苦しんでいるのです。ですが、近年はそもそも同和問題という言葉の意味すら知らない人が増えてきています。同和問題がだんだんと過去の出来事として私達の記憶から薄れてきてしまっているのです。これは一見、同和問題に関しての差別意識が薄

れるいい傾向だと捉えられがちですが、その反面誤った情報が広まる可能性が増えてしまうのです。最近はインターネットが普及し、誰でも簡単に意見を発信することができるようになっています。そんな中でも、差別をなくし人々が豊かに暮らしていくためには個人個人を見て自分で判断することが大切だと思います。「同和地区」と大きくくくってしまうのではなく、個人個人として相手を見ることができれば、人々の差別意識はなくなると思います。

今期、人権学習を通して学んだ人権感覚を、これからも大切にしていきたいです。

ヘルプマークに目を向けて

戸倉上山田中学校 三年 倉島優衣

みなさんは「ヘルプマーク」というものを知っていますか。

ヘルプマークとは、外見からは障がいや疾患などがあることが分からない人が、周囲の人からの支援や配慮が得やすくなるようにするマークのことです。ヘルプマークは、障がいや疾患の種類によって対象者の基準があるわけではなく、支援や配慮を必要とするすべての人がヘルプマーク利用の対象者となりま

す。また、ヘルプマークの受け取りに障害者手帳や診断書の提示は必要なく、本人以外の家族など代理人が受け取ることも可能です。

私はヘルプマークを持っている男性に出会ったことがあります。ヘルプマークの存在は以前から知っていましたが、実際に使用している人を見るのは初めてだったので、少し驚きました。その人の外見からは特に異常が感じられなかったため、いざこの男性が助けを必要としたときに、ヘルプマークの存在はとても重要だなと思いました。一方で、ヘルプマークの認知度は低く、いざというときに気づいてもらえなかったり、声をかけてもらえなかったりと困っている人がたくさんいることを知りました。このような思いをしている人を減らすためにも、特に認知度が低い高齢層や小都市で、ヘルプマークの存在を知ってもらう必要があると思います。また、ヘルプマークの存在を認知していても、実際には声をかけられない人も多いのではないのでしょうか。そんな人たちのためにも「サポートマーク」というものがあります。サポートマークとは、何か困ったことがあれば声をかけてくださいという意味を示す、ヘルプマークの逆転の発想によって生まれたものです。これを身につけることで、ヘルプマークをつけている人は助けを求めやすくなり、困っている人を助けたいけど声をかけづらい人にとってもありがたいものだと思います。

最後に、私たちにできることとして、病気や障がいによって疲れやすい人や、つり革につかまり続けることが困難な人のために、電車やバスの中で席を譲る。また立ち上がったたり、歩いたり、階段の昇り降りが困難な人もいるということを念頭に置き、駅や商業施設で困っている人がいたら声をかけてあげる。災害時に、視覚障がいや聴覚障がいのある人がいたら、状況の把握が難しいこともあるため、安全に避難できるようサポートしてあげるなど、私たちにできることはたくさんあります。ヘルプマークをつけている人に限らず、困っている人がいたら声をかけてあげる。そんな人が一人でも多くなればいいと思います。

「いじめ」を通して、考えたこと

戸倉上山田中学校 三年 南 沢 瑠 菜

「いじめ」という言葉と無縁だと思っていた私が、小学5年生ぐらいのとき、私の所属している集団の中でいじめが起きました。

私が通っていた小学校は人数が少なく、保育園のときからの仲間と一緒に小学校に上がります。小学校に上がった頃には、ほとんどの人と3、4年の付き合いがあり、関係ができて

いて、みんながみんなを理解し合っていました。みんなが互いを理解し合っているため、いじめなんて一切ありませんでした。しかし小学4年生5年生ぐらいのとき、初めて「いじめ」がありました。なぜいじめが始まったかは覚えていませんが、その子とは保育園の頃から一緒の子でした。そのいじめは急に始まり、徐々にクラス全体へと広がっていきました。初めは数人がバイ菌扱いをしていて、今までいじめというものがなかった私は意味が分からず、これが「いじめ」と感じていませんでした。しかし、そのうち無視をする人もできてきました。そこで私は、これっていじめなのではないかと思い、友達と一緒に先生に相談することにしました。先生と私達はみんなの前でその子に対していじめであるということを言いました。それからみんなの接し方は変化していくことができました。いつから始まったかわからなく、日を重ねていくたびに少しずつ悪化していて、このまま続いていたら怖いと思いました。だから、私と友達はこのことを先生に伝えることができて良かったと感じています。

いじめにもたくさん種類があると思います。私が「いじめ」と聞いて思いつくのは、いじりが原因となっていじめになるものです。私はこれに対して、いじりといじめの線引きはきつと人によって異なり、難しいものだと思います。ですが、いじめはいじりと違って相手が嫌な気持ちになります。弱いも

のいじめという言葉があるように、自分より弱いものに一方的に攻撃することなどを忘れたくないし、みんなにも忘れてほしくないと思います。また、いじりというのもあまり良いものではないと考えます。いじる側は「冗談を言っているだけ」と思っているかもしれないが、いじられている側は少しでも傷ついているかもしれない。少しでも相手が嫌な気持ちになったら、いじめと同じなのではないでしょうか。

私はいじめをなくすために、一番はみんなが仲良くすることです。しかし、誰にでも相性や好き嫌いがあります。だから、誰かがいじめられている人の気持ちに気づいてあげられること、相談できる環境をつくり守ることだと思います。そんな環境をつくり、相手の気持ちに気付ける人に私はなりたいです。

佳作作品

『自分の意志を伝える大切さ』

屋代中学校 一年 村 石 彩 佳

私は世界の国々の差別の問題や女性の教育について大きく二

つ学びました。

一つ目は、アメリカの人種差別です。「I have a dream.」という言葉で知られている、人種差別をなくそうと闘ったマーティン・ルーサー・キング・ジュニア（キング牧師）さんの有名な演説です。一九六〇年代までのアメリカでは、例えばバスでは黒人白人専用席があり、白人の席が満席になると、黒人は席を変えさせられたり、トイレも別々だったり黒人に対する差別がたくさんありました。キング牧師の夢は、白人でも黒人でも同じ人間として生活できるようになるという当たり前の夢でした。でもその当たり前の権利が黒人には認められていなかったのです。キング牧師は「アメリカ独立宣言には、『すべての人は平等』と記されている、『すべての白人』ではない、黒人も含む『すべての人』だ」と訴えました。やがてキング牧師には仲間も増えていきました。辛いときでも、支えてくれる仲間がいるから続けられると、キング牧師から『仲間の大切さ』を学びました。

キング牧師が亡くなる前日にした『We shall overcome.』というスピーチの言葉が印象的です。『私達は打ち勝つ。たとえ遠回りをしていたとしても、行き着く先に正義がある限り。私達は打ち勝つ。なぜなら『偽り』が永遠に行き続けることはないから。私達は打ち勝つ。私はそれを心の深いところで信じている。』どんなに困難があっても、自分たちが行き着く先に

は、必ず『悪』ではなく、『正義』が打ち勝つ、というキング牧師の思いが伝わってきて感激しました。しかしキング牧師は一発の銃弾で夢の実現の前に命を落としてしまいました。私は、『正義』を求める善人が握りつぶされてしまう世界はあってはならないことだと思いました。意見を尊重し合う心があれば平等な世の中になると思います。

二つ目は、女性が教育を受ける権利です。そのことを主張した一人マララ・ユスフザイさんは、男女差別や教育の大切さを現在も訴えています。マララさんの『One child, one teacher, one book, and one pen can change the world.』という言葉は、女性が教育を受ける権利について世界中へ表明する彼女の強い決意でした。命をかけてまで『自分の考え』を大事にしている姿に私は感激しました。私は、マララさんが学校にいけなかった少女の一人として、訴えていることを知りました。いっぽうで、マララさんの願いを止めようとする人々もいます。マララさんは、中学生の頃、イスラム過激派組織に銃撃されました。このことでマララさんの決意はさらに強くなりました。マララさんは、命が狙われていても意志を貫き通そうとしたのです。十七歳の少女の行動から、自分の意志を示していくことの大切さと、私達でも国や世界を動かすことができることを知りました。

このように、キング牧師もマララさんも、一人ひとりの平等

が大切だというしっかりとした考えを持ち、それを周りに訴え、そして行動をしてきました。それが人々にも伝わり、やがて世界の人たちに影響を与え、差別についての考えも少しずつ変わってきました。けれども、世界にはまだまだ男女差別や、人種差別が残っています。自分の周りでも、例えば「男だから」「女なのに」、という男女の役割を思い込みで決めてしまうことがよくあります。ジェンダーレスで平等な社会になっていくとは言えません。私は、間違っていることに対してはキング牧師やマララさんのように、行動することで未来を少しでも明るく良い世界にしていきたい。今回、二人の行動について学んだことによって、自分達から動いていけないといけない、と思うきっかけになりました。

『差別をなくしていくための私の考え』

屋代中学校 二年 高木 結衣

私は後期人権学習を通じて、差別の意識は自分達人間の中に必ずあって、なくしていくことはとても難しいことだと思いました。

後期人権学習では去年に引き続き同和問題・部落差別につい

て学びました。去年は同和問題の概要や歴史についての内容でしたが、今年は同和問題の解決のためにどんな人達がどのよう
に行動を起こしたのかということが中心でした。そのときに全
国水平社の存在を学びました。全国水平社とは全国の被差別部
落の人々によって創立された部落差別を撤廃するように呼びか
けた運動団体です。私は全国水平社を創立した西光万吉さんの
「その姿勢こそが部落民を見下しているのです」という言葉に
はっとさせられました。

今までの私は差別の話や人権問題の話聞いたとき、「大変
だな」「ひどいな」「可哀想」といったように無意識のうちに他
人事として受け止めていました。しかし、その考えには本来許
されることのない差別の意識が潜んでいることをこの言葉で認
識させられました。

さらに授業で『差別』の意識が自分にあるか、『差別』は
どこにあるのか」ということを考えました。そうして振り返っ
たときに、自分も無意識のうちに差別の意識を持って差別をし
ていたことを再認識しました。例えば、私の塾では月に一回く
らい外国人の先生が来ます。私とその先生に意見を言っても、
他の生徒などたくさんの方が一緒に話しているので、聞き取っ
てもらえないことがありました。私はそのときに「無視され
た」と感じて、「やっぱり外国人の人とはわかり合えない」と
思いました。今思えばその考えは間違っていたと思います。

では、差別の意識はどこにあるのでしょうか。私は、「自
分が有利な立場に立ちたい」という気持ちや「あの人と私は別
のものだ」という気持ちにあると思います。

人権学習で『同和問題・部落差別』と他の差別の違いを
考えたときに「同和問題・部落差別だけはわざわざ違いを作っ
ている」ということを学びました。わざわざ違いを作るのは、
自分が相手よりも有利な立場に立ちたいという気持ちで相手を
見下すことに似ていると思いました。また、自分がその時代に
被差別部落の人々と出会っていたら「あそこの人々と自分達は
違う人間」と考えているとも思いました。そこには相手に対す
る恐怖心や相手のことをよくわかっていないからといった原因
があると思います。

では、どうすれば差別をなくしていけるのでしょうか。
私は「相手に対する先入観を捨てて接する」ことだと思いま
す。相手が怖そうな人でも実は優しくかったということがあるよ
うに、先入観だけで関わる人を選んで関わらないよりも、先入
観を捨てて色々な人と関わった方がいいことがあると思いま
す。このような気持ちがあったら、部落差別もひどくはならな
かったのではないのでしょうか。

今回の学習で学んだことを活かして、これから生活をしてい
きたいです。

今を生きるみんなの色

更埴西中学校 三年 宮原 汰希人

私は今まで、LGBTQといった人権の問題に対して、「私には関係ない」と目もくれず、気に留めていませんでした。しかし、今回の人権学習で、もしかしたら、この更埴西中学校にも、身近な友人の中にも、自分の性の自認に関して悩んでいる人がいるかもしれないと思い、考えが変わりました。私は生まれたときから、からだの性も、こころの性も、正真正銘の男性で、LGBTQの方々の気持ちが完全にわかるわけではありません。でも、少しでも相手を理解して、寄り添ってみようと思いました。

私も、人権講演会の講師を務めてくださった坂井さんが、お話の中もおっしゃっていたように、自身の性自認に悩んだ末、感極まり泣いてしまっている子には、慰めや同情の言葉を掛けても意味がないと思います。できれば、そばで一緒に泣いてあげたい。でも、私はそれができるかわかりません。そこで、私が行き着いたのは、「相手が泣きたいときは、気が楽になるまで泣けるように、私はただ、近くで寄り添っている」という答えです。ただ距離を置き、遠目で見ていただけでは、かえって不安感や恐怖を感じてしまい、更に感情が不安定になっ

てしまうと思えました。だから、背中をさすることや、可能であれば、抱きしめてあげたいと思います。そして、安心できる場所で、一心に泣いてほしいと考えました。

生まれたときに決まる性は、男女という二色の性別のみですが、ご講演で坂井さんもおっしゃっていたように、「世界には生きている人の数だけ性がある」と思います。本当にその通りだなと感じました。世界中を探しても、私はもう一人いない。たった一人の自分だからこそ、それが私の性だと、自分を認めることが大切だと学びました。将来、出会い、生きるすべての人に知ってほしいことだと思いました。

「共生」とはなにか

戸倉上山田中学校 三年 古旗 あかり

2020東京パラリンピック。テレビでそれを見ていた私は戸惑ってしまった。手足が不自由な人、目が見えない人、腕がない人……つまり、障害のある人たちがスポーツをする。それをどう応援したらいいかわからなかったのだ。モヤモヤとした気持ちは解決を見ることなく、私の胸に溜まり続けた。

三学年の人権学習では「ソーシャル・ビュー」のことについ

て学習した。それは、見える人と見えない人がグループになって、積極的に声を出してやり取りしながら美術作品を鑑賞するものだ。

私たちは実際にそれをやってみた。グループをつくり、一人が目隠しをして、残りの人たちがスクリーンに映し出された絵を説明する。「消しゴムみたい」や「リコーダーを持っているみたい」など、抽象的な絵を比喻を使って説明した。だが言葉にするのが難しく目隠しをしている人からの質問に詰まる場面も多くあった。しかし、なんとか言葉を手繰って説明するうちに作品に対する理解が自分自身もまわりの人たちも深まったように感じた。また、同じグループの人が違った言葉で説明する場面もあり、同じ絵だがいろいろな見方ができることに気付いた。

「ソーシャル・ビュー」で、私は「みんなで見る」ということを体験した。このとき、目が見えない人は助けが必要な弱い人ではなく、私たちの理解を助ける役割を果たしている。もちろん、私たち見える人も見えない人の理解を助けている。つまりお互いに助け合って「みんなで見てみる」のだ。そう気づくと、あのとき感じたモヤモヤが晴れていくように感じた。そう、お互いに助け合って、必要あれば、よりかけ合っていくのが「みんなでやる」「みんなで生きていく」ということである。それはつまり、「共生」ということなのではないだろうか。

今年もオリンピック、パラリンピックが開催される。アスリートたちは私たちに感動と勇気を与えてくれる。そして、私たちは応援することでアスリートを支える。お互いに支え合ってこそそのスポーツの祭典である。今年には家族と成績の許す限り、テレビの前に陣取って精一杯の声援をおくろうと思う。

「戦争はいろいろなものである」

戸倉上山田中学校 三年 中村 夏月

私は3年生になって歴史の授業で戦争について学びました。やはり、戦争というと太平洋戦争が真っ先に思いつきます。授業で当時の映像や写真を見て、とても苦しい気持ちになりました。疎開する子どもたちや出兵する日本兵、原爆の落とされた街は戦争の恐ろしさを物語っていました。もちろん原爆だけでなく空襲や飢餓などで亡くなってしまった方もいました。また、日本人以外にも多くの方々が被害を受け、亡くなったことを知りました。私は、二度とこのようなことは起こしてはならないし、この話は百年後も千年後も語り継ぐべきだと思いました。また、歴史以外でも道徳や国語でも戦争中の物語や詩を学びました。物語を読んで、聞いているだけなのに当時の悲しみ

や衝撃を感じました。今の生活とは真逆の、死と隣り合わせの生活を送っていたなんて考えるだけで恐ろしいです。物語の中で家族が亡くなってしまったり、食べ物がなくて苦しい思いをしていたりする場面を読むと、本当に戦時中のつらさがわかりました。

今の日本はテロや大きな争いもなく平和です。しかし、世界に目を向けるとそうではありません。ニュースで報道されていたロシアのウクライナ侵攻、ガザ地区での争いなど、世界ではいろいろな争いが起きて死者が出ています。現地の人によって撮影された映像を見ると、「まさか、こんなことが起きていいのか」と思ってしまう。

私は「どの国にも戦争をしてしまう理由はあるのかもしれない。争いのもとがあるのかもしれない」と思いました。宗教的な問題だったり、環境や経済的な問題だったり様々な因果関係によって戦争が起きてしまうのだと思いますが、それでも戦争を起こしていい事にはなりません。巻き込まれた市民に大きな被害をもたらしてしまったり、経済制裁を受けたりと、結果的により問題が大きくなります。更に戦争の影響は終戦しても続いてしまいます。建物の復旧や国民への支援などでお金がなくなってしまうったり、他の国や地域との関係が悪くなってしまうたりすれば、悲惨な事になってしまいます。

私はここまで戦争をするべきではない理由をたくさんあげて

きました。私自身戦争を経験したことはありませんが、戦時中の写真や映像がとても痛ましいものだったからこそ、戦争はするべきではないと思っています。みんなが人権を持ち安心して暮らせるように、戦争について語り継ぎ、二度と起こさないようにしていこうと思いました。明るく平和な未来を作っていきたいです。

かがやき

—令和6年度 差別の解消をめざすことをテーマとした人権作品集—

発行年月 令和7年3月

発行 千曲市・千曲市教育委員会

編集 千曲市 健康福祉部 人権・男女共同参画課

〒387-8511 長野県千曲市杭瀬下二丁目1番地

TEL 026(273)1111

FAX 026(273)8787

E-mail: jinken@city.chikuma.lg.jp